

『斯文』に見る近代漢文教育史

小金澤 豊

一 はじめに

今日ほど、漢文教育の危機が叫ばれている時代はない。しかし、歴史を遡ってみると、明治以降、わが国の近代教育制度が急速に確立されていくにしたがって、漢文教育は再三にわたって危機的状况に遭遇した。そんな中において、一貫して漢文教育擁護論を展開してきたのが、斯文會発行の『斯文』である。

はじめ斯文學會といった斯文會は、明治十三年六月に設立された。その後大正七年九月に一時解散し財団法人として再出発し、今日に至っている。その機関誌としての『斯文』は、大正八年に創刊された。漢学関係の学術誌として多くの発表の場としての役割を担うのだが、ここには、専門的な学術論文だけにとどまらず、たくさんの漢字・漢文教育関係の論考が寄せられている。

早くは『斯文』創刊の大正八年四月の第一編第二号に斯文會研究部による「中學校に於ける漢文科に就いて」という記

事が現れ、昭和二十年九月の宇野哲人による「日本の将来と斯文會の使命」に及ぶまで、戦前だけに時期を限ってみても、のべにして一一五回にわたる論考が寄せられている。

『斯文』は、昭和二十年の終戦に伴っての組織改正を経た後、昭和二十三年十二月から新たに再出発をするのだが、この記念すべき第一号にも松井武男「漢文教育界最近の動向」が載せられており、その立場が、漢字・漢文教育問題に大きな関心を持っていることを示している。さらに、昭和三十二年三月の第一八号では、「漢文教育特輯號」と銘打って大々的な特集を組んでいる。そして、昭和三十六年九月の第三十一号では、「道德教育特輯號」として、漢文の徳育的な要素に焦点をあてた特集を行っている。戦後のこのような漢字・漢文教育関係論考の記載は、のべ四十回に及んでいる。

こうした漢字・漢文教育関係の論考は、昭和四十八年七月の第七十三号で江連隆の「コミュニケーションと漢文——漢文教育のために——」を最後に、姿を消す。これは、大学漢文教育研究会、全国漢文教育学会が教育問題を取り扱うという役割を担うようになったためと考えられる。

現在、『斯文』は中国学や日本漢文の論説を専らにしており、漢字・漢文教育関係の論考や実践報告等は、全国漢文教育学会の『新しい漢字・漢文教育』誌に委ねられるようになった。そういう意味からすれば『斯文』の性格が変貌しつつあるといえなくもない。しかし、『斯文』誌上で展開された漢文教育を巡っての諸問題は、いずれも今日的な問題を含んでいると考えられる。そこで、本稿では、明治以来の学校制度の移り変わりに伴う漢文教育の在り方を検証し、『斯文』に掲載された漢文教育の論点、問題点を整理しながら、今日的な漢文教育の問題等について考えていく。

二 近代教育制度の確立

明治以降、急速に近代化を推し進めていったわが国にとって、教育制度の確立は重要な国家的課題のひとつであった。

明治五年の学制發布は、その出発点とも言うべきもので、見逃すことはできない。学制から教育令、学校令と、時代を追いつながら近代日本社会において学校制度が確立されていく過程を追いながら、その中での漢文の扱われ方について見ていくことにする。

さて、学制には、その前文とも言うべき「被仰出書」があり、⁽¹⁾ここでは学制發布の精神が、次のように述べられている。それは、

人能ク其才ノアル所にニ應シ勉勵シテ之ニ從事シ而シテ後初テ生ヲ治メ産ヲ興シ業ヲ昌ニスルヲ得ヘシサレハ學問ハ身ヲ立ルノ財本共云ヘキ者ニシテ人タルモノ誰カ學ハスシテ可ナランヤ⁽²⁾

というもので、ここでは、人として学問を修めることの大切さを説きながらも、これまでの社会状況下にあつては、万人が学を修めることが必ずしも思うにまかせなかった理由を、次のように分析している。

從來學校ノ設アリテヨリ年歴ルコト久シト雖トモ或ハ其道ヲ得サルヨリシテ人其方向ヲ誤リ學問ハ士人以上ノ事トシ農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ之ヲ度外ニヲキ學問ノ何物タルカヲ辨セス⁽³⁾

学問というものが「士人以上」がなすべきものという社会通念が生きている世にあつては、万人がものを学ぶということとを前提とした制度を樹立していくことは、よほどの困難が伴ったものに違いない。

ともあれ、明治維新後の新しい政府の下で、全国民を教育の対象にすえるという、わが国の教育史上画期的とも言うべ

き学制がスタートしたわけであるが、やがて教育令が制定されるに至る。

学制から教育令への推移については、「当時の日本の社会は、このような画一主義的な教育制度を受け入れ得るまでには発達していなかった」として、「自由主義的、地方分権的な制度を取り入れ、フランス流の画一主義的、中央集権的な『学制』の手直しをしようとした」という見方が一般的なようであるが、「この制度は、一般的に教育の国家の統制をゆるめて、教育の地方分権をはかったものといわれている。が、その第一条に『全国教育事務は文部卿之を統攝す故に高校、幼稚園、書籍館等は公立私立の別なく皆文部卿の監督内にあるべし』と規定されており、教育の国家統制の基本方針はいささかも揺らぐものではなかったのである」という指摘もある⁽⁵⁾。

学制、教育令、そして学校令と、わが国の近代的教育体系は急速に整備されていった。ここに近代の学校制度が確立していくわけであるが、それは明治日本の政治的な骨組みと一体化していることが注目される（表1参照）。

〔表1〕

年	主な教育制度の変遷	内 容	出 来 事
明治四年			廃藩置県 戸籍法
明治五年	學事獎勵に関する被仰出書 學制 小學教則 中學教則略	學制の序文・前文に相当 學制実施の方法（施行規則）	太陽暦
明治六年	小學教則改正	「字」↓「時」に改める	徴兵令
明治十年			西南戦争

明治十二年	教育令	田中不二麻呂の自由主義の方針 学校の定義↓小學校、中學校、大學校、師範學校、專門學校	
明治十三年	教育令改正	自由主義の引き締め 文部卿認可を必要とする	
明治十八年	教育令改正	小學校場の認可	内閣制度
明治十九年	小學校令 中學校令 帝國大學校 小學校ノ學科及其程度 尋常中學校ノ學科及其程度	今迄は教育令の中にすべての學校に関する法令が入る 今度は別々の學校令で規定 尋常小學校四年 高等小學校四年 尋常中學校五年	第一回條約改正會議
明治二十二年			大日本帝國憲法發布
明治二十三年	教育勅語 小學校令	尋常小學校三又は四年 高等小學校二、三又は四年	府県制・郡制 第一回帝國議會
明治二十四年	小學校教則大綱 中學校令改正	前年の小學校令に基づくもの 「府縣ニ於テ便宜設置↓一校設置」等	
明治二十七年			日清戦争
明治二十八年	高等女學校規定		
明治三十二年	中學校令改正 高等女學校令		

明治三十三年	小學校令改正	尋常小學校四年 高等小學校二、三又は四年	
明治三十四年	中學校令施行規則 高等女學校施行規則		
明治三十五年	中學校教授要目		日英同盟
明治三十六年	小學校令改正 高等女學校教授要目	小學校教科書の国定制度	日露戦争
明治四十年	小學校令改正	尋常小學校六年	

三 漢文・漢学の印象について

近代化の確立を急ぐ当時のわが国の社会的な雰囲気の中で、漢文・漢学という存在はいったいどのようなものとしてとらえられていたのだろうか。

まず、西周が『明六雜誌』に寄せた「洋字を以て国語を書するの論」という文章から見ていく。

十利

- ①この法行わるれば、本邦の語学立つ
- ②童蒙の初学まず国語に通じ、すでに一般事物の名と理とに通じ、次に各国の語に入るを得。かつ同じ洋字なれば彼を見る、すでに怪むに足らず。

三害

- ③言うところ、書くところとその法を同うす。もって書くべし、もって言うべし。
- ④アベセ二十六字を知り、いやしくも綴字の法と呼法とを学べば、兒女もまた男子の書を読み、鄙夫も君子の書を読み、かつ自らその意見を書くを得べし。
- ⑤洋算法行われ、人往々これを能くす。これとともに横行す、その便知るべし。
- ⑥近日、ヘボンの字書、また仏人ロニの日本語会あり。しかれども直ちに今の俗用を記し、いまだその肯綮を得ず。今この法ひとたび立たば、これらまた一致すべし。
- ⑦この法はたして立たば、著述、翻訳はなはだ便りを得ん。
- ⑧この法はたして立たば、印刷の便ことごとく彼の法により、その輕便言うばかりなるべし。
- ⑨翻訳中、學術上の語のごときは、今の字音を用うるがごとく、訳せずして用うべし。
- ⑩この法はたして立たば、およそ欧州の万事のことごとく我の有となる。

- ①筆墨肆その業を失う。
- ②紙の製、改めざるべからず。
- ③漢学者流・国学者流、この説を伝聞せば、すこぶるこれを厭い妬む者あらん。⁽⁶⁾

ここでは洋字の良い点は軽く十も挙げられているが、負の面についてはわずかに三点のみである。それも、関係する職業に携わる者が困るということだけで、文化的な面については何も触れられていない。

また、漢学に対する負の印象として名高いものに、福沢諭吉の言葉がある。

私はただ漢学が不信仰で、漢学に重きをおかぬばかりでない、一步を進めていわゆる腐儒の腐説を一掃してやろうと若い時から心掛けました。⁽⁷⁾

これより時代は下るが、国語改革の一翼を担った保科孝一が、当時の雰囲気を回想している文章がある。

当時学術的なものはすべて文語文、しかも漢文直訳体のものであったから、漢学者などは口語文は車夫馬丁の書きつづるもので、士君子のいやしくも筆にすべきものではないと批評していた。

(略)

漢学者と法学者はつい近ごろまで口語文をきらっていたが、すでに今日ではそういう人々はたいてい故人になって、新しい若い学者は、なんのこだわりもなく、いずれも口語文を用い、文語文を固守する人があれば、むしろ世にいれられないであろう。⁽⁸⁾

当時の風潮を評してイ・ヨンスクが、「明治期までは、それがたとえ反清意識からにせよ、漢字の全廃は多くの知識人、さらには文部官僚にまで及ぶ考えだったということである。」⁽⁹⁾と論じていることは、重要な指摘である。

しかし、漢学廃止論だけが叫ばれていたかと言えば、決してそのように断定するわけにはいかない。三浦叶⁽¹⁰⁾は『明治の漢學』の中に「啓蒙思想家の漢學觀」という章を設け、新島襄、内村鑑三、中村敬宇、福沢諭吉、西周、加藤弘之、中江兆民、西村茂樹、井上毅の漢学觀について述べているが、彼らはいずれも漢学の素養の上に立ちながら自己の思想を育んでいる。

漢学批判の急先鋒とも言える福沢諭吉の漢学の素地を見ると、現在では到底考えられない程の量の漢籍に親しんだ経験の上に立って持論を展開しているのだから、「腐儒の腐説」といった批判の部分だけを取り上げて論じて、片手落ちである。むしろ福沢の、次のような素養の方に注目すべきであろう。

白石の塾にいて漢書は如何なるものを読んだかと申すと、經書を専らにして論語孟子は勿論、すべて經義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩經に書經というものは本当に講義をして貰って善く読みました。ソレカラ、蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、莊子というようなものも能く講義を聞き、その先は私独りの勉強、歴史は史記を始め、前後漢書、晋書、五代史、元明史略というようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五卷の内三、四卷でししまうのを、私は全部通読、およそ十一度び読み返して、面白いところは暗記していた。⁽¹¹⁾

こうした時代の雰囲気を知る手掛かりとして、文学作品に描かれた世界を参考にすることは有用な方法である。たとえば、田山花袋の『田舎教師』の中に、次のような一節がある。

北川は漢学には長じていた。父親は藩でも屈指の漢学者で、漢詩などをよく作った。今は町の役場に出るように

なったので止したが、三年前までは、町や屋敷の子弟に四書五經の素読を教えたものである。午後三時頃から日没前までの間、蜂の唸るような声は常にこの家の垣から洩れた。⁽¹²⁾

明治以降はひたすら西欧文明の摂取につとめた西欧化の時代であると、ひとくくりにはできない社会の雰囲気というものが濃厚に存在していたこともまた事実である。このことを確認した上で、『斯文』掲載の論考に目を向けていきたい。

四 創刊から昭和二十年までの『斯文』掲載の教育論について

今、『斯文』に掲載された教育に関する論考を考察していくにあたって、その時期を、創刊された大正八年から終戦を迎える昭和二十年に時期を限ることにしたい。それは、現在でも論議されるような漢文教育に関する論点のほとんどが、すでにこの時期に登場していると考ええるからである。

まず、この時期に『斯文』に載せられた一一五回の教育論を内容別に分類することにする。分類する際の項目の立て方については、いろいろな具合に考えられると思われる。今、『斯文』の一冊の号に載った論をひとつとして数えることにする。すなわち、続きものとして複数号に掲載された論は、これを複数回に数えることにする。また、論じられている内容が複合的なものも見られるが、論の主眼がどこに置かれているかを考えながら、ひとつの論に対して一項目という分類を試みた。

- ・ 女子教育に関するもの 七回
- ・ 教員の養成に関するもの 四回

- ・ 漢字・漢語に関するもの 十一回
- ・ 漢文科の名称に関するもの 七回
- ・ 漢文教材に関するもの 二回
- ・ 教育勅語に関するもの 二回
- ・ 指導時間数に関するもの 七回
- ・ 訓読に関するもの 十一回
- ・ 中国語とのかかわりに関するもの 三回
- ・ 広く漢文教育の必要性を説くもの 五十九回
- ・ 建議案、意見書 二回

ア 女子教育に関するもの

女子教育に言及された論について考えていく。

その場合、まず注目すべきは、明治二十八年に出された高等女学校規定である。この第一条には、

高等女学校ノ學科目ハ修身、國語、外國語、歴史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音楽、體操トス
又随意科目トシテ教育、漢文、手藝ノ一科目若クハ數科目ヲ加フルコトヲ得

とある。

この「随意科目」としての漢文の位置付けが、その後に出された高等女学校令施行規則（明治三十四年）や高等女学校

教授要目（明治三十六年）からは外されてしまうということが起きている。こういう事実について「性差をはじめ、漢文を学ぶ学習対象は一定の区分が持ち込まれていたことを想起すべきだろう」との指摘がある。⁽¹³⁾

『斯文』に載せられた女子教育論考の初めは、第十一編第七号（昭和四年七月）の「高等女學校と漢文科」という斯文会教育部による座談会速記記事である。

これは宇野哲人教育部長と委員を囲んでの座談が同年六月八日に行われ、その模様を速記したものであるとの紹介があり、最初に「當部主張の一たる高等女學校の課目に漢文科を加ふるの件」と、斯文会の女子漢文教育に対する立場が明確化されている。「高等女學校に漢文を入れなくなつたのは何時頃でせうか」という座談会出席の委員の質問に対し、別の委員が「それは随分古いことと思ふ」と答えるなど、すでに昭和四年の時点で、かなり長い間女子教育の場から漢文が外されているという実感を出席者が抱いていたことがうかがえる。

出席者からは、漢文に触れないまま教育を終える女子にとって、男子との性差が広がることを憂える旨の発言が目立つ。「初めから女子の方は女らしくと云うやうに、低く教育しようと云う風になつて居ては、益々低くなつて行くことになる」という、委員の発言がその模様をよく伝えている。

イ 教員養成に関するもの

漢文科の教員養成に関する論考には、第三編第二号（大正十年四月）に宇野哲人の「高等教員檢定漢文科試験に就いて」がある。漢文科教員の資質として「第一は確かなる讀書力を有することである。第二は漢學に對して一般的に廣く行き渡つて居ることである。第三には研究の方法を知つて居ることである。」として、「書目中になくとも左、國、史、漢の如き

ものは本文ばかりでなく注までもよくよく読んでおく必要があると思ふ。」と、教員に対して、生徒の教育だけにとどまらず、学問的にも妥協のない要求をしている。

第十四編第三号（昭和七年三月）の、田口福二郎「若き漢文教師に與ふ」は、「えらい先生」「学問の深い先生」と言われるよりも「熱心な先生」と言われたほうがよいとして、孔子も吉田松陰も熱意あふれる教育者だったと言い、教育の根本は何たるかを、これから教壇に立とうという若い人に向けて説いている。

第十九編第九号（昭和十二年九月）の、林古溪「改正教授要目研究協議會と私の希望」でも「熱と愛と自覺」「自覺とはおれは教員であるといふ自覺」という言葉が目にとまり、第十九編第十二号（昭和十二年十二月）の、田所義行「漢文振興と漢文教育者」にも同様に「教育の根本義は技術を教へることでもなく機械を造ることでもなく、知を通して人間を作ることである。」と、教師の熱意を説いている。

ウ 漢字・漢語の問題に関するもの

漢字・漢語の問題については、第十編第八号（昭和三年八月）に、種田豊馬の「漢字の能率的検索法の實際化」が、最初に載せられている。「漢字の呪はれること今日の如く甚しきはない」という書き出しで始められるが、康熙字典の部首分類法に言及しながら「西人の所謂『漢字は悪魔の遊戲なり』との悪口を康熙字典式分類方法に於て痛切に感ぜさせるを得ない」と述べた後、「漢字排列法式の根本的革新」の私案を考え、タイプライター使用の際の留意点にまで触れていることは、今日の漢字とコンピュータの問題の先駆けとも言えよう。

第二十編第九号（昭和十三年九月）の、太田兵三郎「最近の國語改良運動と漢字漢語の問題」には「近時の満州事變並

に日支事變の勃發は、新聞紙上等に微するも、いよいよ漢字漢語の流行を來すかに見える」と、当時の時局が反映した社会的な雰囲気がかがえる書き方が見えるが、「漢字・漢語の難澁性」が「近代文化の普及發達を阻害する文化の敵」であると非難する論調の存在に触れ、漢字・漢語の排斥や制限が「畫策されて」、その結果として大正十二年の文部省臨時國語調査會の一九六〇字、昭和六年同總會の一八五八字の制定となったと述べている。この筆者は「漢字・漢語の長所は種々あらうが、何といつても簡潔であること、含蓄に富むことの二點を注意せねばならぬ。」という。

昭和十七年に文部省が標準漢字表を制定したことに關連して、第二十四編第五号（昭和十七年七月）の高田集藏「常用の制定を縁として」には、すでに漢字が国字化されており、その証明として、日本語の「駅」を中国では「車站」ということなどを挙げて、日本と中国での漢字の意味の違いについて説明している。そして「選定された常用並に準常用漢字を一瞥するに、先づ之に特別漢字を併せると二五二九字となり、前回査定修正の一八五八字に比し實に六七一字の増加を見る」と評価しながらも「制定外の漢字使用に干渉すると云つた方針は宜しくないと思ふ。」としている。このあたりの制定字数の増加については、当時の時代背景が大いに關係したようである。⁽¹⁴⁾

エ 漢文科の名称の問題に関するもの

漢文科の名称の問題については、国語科の名前の下に統合される動きに対して『斯文』誌上でそれぞれの論者が反対運動を展開している。そのいきさつについては、例えば第十七編第八号（昭和十年八月）の、飯島忠太「中學校に於ける漢文科名の廢止に就いて」の中でこう説明されている。

「本年開かれた中學校長協會の總會に於て、中學教育の内容の改善案が決議せられて、其の中で、現在の國語漢文科を改

めて單に國語科と稱し、漢文をば國語の一部として取扱ひ、其の國民的性情を涵養する方面に重きを置いて教へることにしようといふことになつた。」

こういう動きに反対する主な理由として、同論考では「漢文は國語に附属したものだから、あまり重要でないといふ様な誤解を、中學生に起させ」てしまうことに対する危機感があり、この点に関しては他の論者も同様である。

また、「漢文はどこまでも漢文であつて國語ではない。我が國で取扱ふ漢文は國語によつて訓讀されるから國語の中に入れば強ひて入れられない事もあるまいが、それには少々無理があるやうである。そんな風な論で進むならば、理科でも數學でも、歴史でも地理でも、皆國語によつて取扱はれるから、國語科の中に入れてもよくなるわけであらう。漢文には漢文の獨立性がある。それは英文が英語と一致し、獨文が獨語と一致するのと少しく趣を異にするのである。」というやうな、第十七編第九号（昭和十年九月）の田口福司朗「漢文科の名称と意義とに就いて」に見られる、今読み返せば少々粗雑とも思える主張も、当時の論者の漢文に対する熱情が愚直なまでに吐露されたものと考えてよいだろう。

『斯文』では、第十七編第八号、九号で漢文科名廃止に反対する一大キャンペーンを行っており、とくに第十七編第八号（昭和十年八月）には、同十年七月十九日付けの「中學校長協會ニ於ケル漢文ヲ國語ノ一部トシテ取扱フノ決議ニ對スル意見書」が当時の文部大臣松田源治宛に斯文会会長・公爵徳川家達の名前で提出されたが、第十七編第八号にその内容が載せられている。

附記

一、中學校ニ於テ第一學年ヨリ漢文ヲ課シ上級へ進ムニ從ヒ教授時間數ヲ増加スルコト

一、高等女學校ノ教科目ニ漢文ヲ加フルコト

- 一、實業學校ニ漢文ヲ必修科目トスルコト
- 一、青年學校ニ於テ漢文ヲ教授スルコト
- 一、師範學校ニ於テ特ニ漢文ヲ重視スルコト
- 一、小學校教育ニ儒教ニ關スル材料ヲ更ニ多ク加フルコト

結局、漢文科の名前は「国語漢文科」として存続したまま、終戦を迎えることになる。このあたりの経緯を、野地潤家はこう述べている。

昭和一八年（一九四三）、太平洋戦争（第二次世界大戦）の激化とともに、戦時下の「新制中等学校教授要目」が制定された。昭和一六年（一九四一）四月、在来の小学校が「国民学校」と改められ、国民科の中に国語科が位置づけられたように、中等学校においても、在来の「国語漢文」は、「国民科国語」として、修身・歴史・地理の三科とともに、国民科の中に統合された。そこでは、講読・文法・作文・話し方の四分科となり、「国語の醇正化」ならびに「古典」の読破力の錬成ということが二つの眼目とされた。国語教科書は、今までの検定制から国定制に切りかえられた。中等学校としては初めてのことであった。⁽¹⁵⁾

オ 漢文教材に関するもの

漢文教材としてどのようなものがふさわしいかについての論考には、第十二編第五号（昭和五年五月）の、世良亮一「中

學校の漢文教材について」がある。

ここでは、まず漢文というものの実態について「名は漢文といふが實は日本文なのである」と述べ、すでに国語としての定着が久しくなっているところから、絶対に廃することはできないという点を強調している。その長所として「大切な東洋思想が包含されている」こと、「簡潔、明易、流暢優麗、立派な文學的作品が多い」こと、「我等日本人の実生活上、知つて置かねばならぬ詩文が多い」ことを挙げ、そういう観点に立って何が教材としてふさわしいかを検討し、次の作品を並べている。

一、國語國文中に生きてゐる漢語は何から出ているか

二、東洋思想として取るべき書物

四書、五經

十八史略、史記、左傳、外史、老子、莊子

三、詩賦、文章として取るべきもの

古詩、唐詩及日本支那各時代の有名な詩

唐宋文其他各時代支那日本の名文

四、古人に道交せしめ志氣を鼓舞するもの

幕末志士の詩

其他忠臣義士哲人傑士の作

頼山陽の日本樂府、乃木大將の詩

次に、これら系統立てた配列にして効果的な学習が行われるようにするべきだとして、次のような学年別配当を提案している

- 一學年 日本外史抄、十八史略抄、日本名文選、和漢名詩
- 二學年 孟子抄、十八史略抄、古文眞寶、和漢名詩
- 三學年 孟子抄、史記抄、古文眞寶、和漢名詩
- 四學年 論語抄、史記抄、日本支那名文選、和漢名詩
- 五學年 論語大學中庸抄、左傳抄、老莊抄、和漢名詩

第十九編第八号（昭和十二年八月）掲載の宇野哲人「漢文教授に就いて學徒に與ふ」は、同年三月二十七日付けの文部省訓令第七号「高等學校高等科修身・國語及漢文・歴史・地理・哲學並ニ法制及經濟科教授要目左ノ通改正ス」を受けて書かれたものである。そこで、この訓令に挙げられている漢文教材をはじめに見ていく。

第一學年 大日本史、中朝事實、弘道館記述義等

孝經、四書、小学、貞觀政要、史記、資治通鑑等

第二學年 四書、荀子、韓非子、帝範、臣軌、近思錄、傳習錄等

和漢歷代名家ノ詩文

第三學年 四書、春秋左氏傳、老子、莊子、墨子、孫子

和漢歷代名家ノ詩文

この選定について、宇野は「從來の要目に於ては、四書、左氏傳、史記、通鑑等を始め、諸子類が、教材として挙げられてゐたが、改めて、大日本史、中朝事實、弘道館述義等、また貞觀政要、帝範、臣軌等も加へられてゐる」と解説している。教材が多岐にわたっていることについては「授業時數の制限も有り、悉く其の總てを取ることは勿論不可能と思はれる。」とし、重点的な指導をすればよいとしている。もともと宇野のこの文章は、高等学校國語及漢文科改正教授要目研究協議会での講演を記録したものであるため、内容の後半は、教育者としての在り方に話が向いている。教育者として第一に「生徒に正しい漢文を会得させ」、第二に学生生徒には常に「熱」と「愛」をもって臨むことを求めている。

カ 教育勅語に関するもの

『斯文』には、時代を反映して、教育勅語に関する論考が載せられている。第十二編第十二号（昭和五年十二月）の宇野哲人「勅語と思想混沌時代」は、昭和五年当時の現代を「思想混沌時代」として、過去にも日本に混沌たる時代が存在したのと言い、それは明治維新後の状況であるとしている。そして、そんな混沌としているところに出されたのが教育勅語であり、したがって今日（昭和五年）に必要なことを、「何をもつて将来の我々の目標としてこの混沌時代を切抜けて行くべきか、やはりどうも適當のものはない。要するに教育に關する勅語の徹底、これより外にはないと思ひます」と、結論づけている。

第二十一編第二号（昭和十四年二月）の小柳司氣太「教育勅語煥發の由来と儒教」は「教育勅語が如何なる經路で煥發

せられたるか、又それが儒教と、どんな関係を有するかを、史實によりて證明することを目的」として書かれている。明治五年の学制頒布から説き起こしながらわが国の教育の変遷を略述し、儒教とわが国との歴史的関係の深さを言っている。そして、「せめて教育に従事する者は四書の知識位は、是非とも御勧めする次第である。」と結んでいる。

キ 指導時間数に関するもの

漢文の指導時間数についての意見、提言がなされている論考を見ていきたい。その前に、明治から昭和戦前期までの国語関係の指導時間数の増減について次に掲げておく。

〔表2〕

小学校ノ學科及其程度

(明治十九年五月二十五日)

尋常小學校	<p>讀書 作文 習字</p> <p>十四時</p>
高等小學校	<p>讀書 作文 習字</p> <p>十時</p>

尋常中學校ノ學科及其程度

(明治十九年六月二十二日)

國語及漢文

第五級 第一年	第五級 第一年	第四級 第二年	第三級 第三年	第二級 第四年	第一級 第五年
五	五	五	三	二	

中學校令施行規則

(明治三十四年三月五日)

國語及漢文

第一學年	七
第二學年	七
第三學年	七
第四學年	六
第五學年	六

中學校教授要目

(明治三十五年二月六日)

國語及漢文

每週	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
講讀	五	五	五	五	五(第一學期及第二學期)二(第三學期) 國語六漢文四
文法及作文	一	一	一	一	一
習字	一	一	一		
國文學史					三(第三學期)

中學校教授要目

(明治四十四年七月三十一日)

國語及漢文

每週	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
國語講讀	四	三	二及隔週一	二	二
漢文講讀	二	二	二	二及隔週一	三及隔週一

中學校教授要目

國語及漢文

(昭和六年二月七日)

習字	文法	作文
一		一
一		一
一	一	隔週一
	一	隔週一
		隔週一

毎週	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
國語講讀	四	三	三	二	二
漢文講讀		二	三	二	二
作文	一	隔週一			
文法	一				
習字	一	隔週一			

第十七編第八号(昭和十年八月)の林竹次郎「傳統の眞理」では、「今の六年(又は五年)以上に、國語讀本中に、平易簡明な漢文をいれ、漢字漢文に親しませること、八年制になれば、尚更、漢文に親しませ、同時に、國語の時間をもつと殖し、中學以上では、國漢を十とすれば、その割合、國三、漢七位にしたい」と、漢文の指導時間数の大幅な増加の希望を述べている。

第十四編第一号(昭和七年一月)の濱野知三郎「漢文初步教授の實際」では、漢文教授の必要時間数として「私は重ね

て言ふ、中學校第一学年の漢文教授は決して困難ではない。そして少なくとも一週二時間以上課す必要があると。」という意見を述べている。

ク 訓読に関するもの

漢文の訓読、音読についての論考がいくつか見られる。訓読の基礎については第十編第十号（昭和三年八月）に「漢文法要略」として「これは本會會員平井孝一氏が、岐阜縣武義中學校漢文科主任教諭として、同校上級生の爲めに著はされたる漢文典にして、普く會員諸君の批評を求めたき趣を以て寄送せられたるものなれば、茲にその全文を掲ぐ」という趣旨から載せられている。漢文の定義と基本的な語法について説明した内容になっていて、次のような目次のものである。

第一章 文の成分排列の位次正序法

第一節 文の主成分排列の位次

第二節 文の副成分排列の位次

第二章 文の成分排列の位次―倒序法

第一節 主語の倒置

第二節 述語の倒置

第三節 客語

昭和三年十月には吉田半農『漢文法要略』に就いて」で、論評を寄せている。

「漢文法要略」が倒置と扱ったもののうち、いくつかについて「變位」と呼び、補語と扱ったもののうちのいくつかを「副詞的修飾語」と呼ぶなど区分けの違いを挙げているが、最後に「漢文學習には文法が必要であるという點に於いては雙手を挙げて賛成したい」と、「漢文法要略」の作者の考えに賛同の意を表している。

ケ 中国語とのかかわりに関するもの

さて、日中戦争が進む時局を反映して、中国との関係が社会の関心事のひとつになり、『斯文』にも中国語教育に言及した論考が見られるようになる。直接的には、昭和十四年二月に漢文に時文を加えることが文部省訓令として出されたことによることが原因と考えられる。

第二十一編第三号（昭和十四年三月）の、林健一「支那語及び支那時文教授の意義及びその實施方法」では、まず中国語學習の必要性について「今次事變の始まって以來、我が國民が支那大陸に發展するには、支那の實情をよく知り、支那をよく理解することが必要であり、そのためには支那人に日本語を學ばせると共に、我が國人も支那語を學ぶべき」と述べて、次のような提案をしている。

一、現在中學校に於て、外國語として、英、佛、獨、支の何れの國語を教へても差支ないのに、現状では殆ど英語のみが教へられてゐる。今後は文部當局並に各府県學務部の努力と、各中學校當事者の協力とによつて、佛、獨、支の各語を英語の代りに教える學校を次第にふやすことにしたい。特に現在及び將來の我が國の情勢にかんが

み、佛、獨、支の中でも、獨、支那の二箇國語に全力を注いでゆくことにしたい。

一、高等學校規定を改正して、高等學校高等科に於て支那語を第一外國語とする文丁（假稱）の設置を實現すること。

第二十三編第九号（昭和十六年九月）の岩村成允「支那時文と漢文なる名稱に就て」では「漢文と時文と同一であるか別箇であるか兩者の關係が判然しない」という疑問を投げかけ、自説として

一、漢文とは時代の古今を問はず總て支那の文章をいふ。

一、「支那時文」なる名稱を廢止し、「支那現代文」といひたい。

を掲げながら、「漢文科教員は當然支那現代文にも通曉しなければならぬこととなり、此點から實行困難となるかも知れぬ」と論をしめくくっているが、ただ漢文のみならず広く現代中國語をも学ばなければならないという姿勢を示した考え方は、今日にも通じるものがある。

コ 広く漢文教育の必要性を説いたもの

ここに、「広く漢文教育の必要性を説いたもの」とした論考の内容は、多岐にわたっている。それをひとくくりにして扱うことについては、更なる分類が必要という見方があるかも知れない。しかし、議論が向けられた先が、特定の個人であ

れ、問題であれ、いずれも当時の時局の動きに敏感に応じながら漢文教育の重要性を訴えている姿勢に変わりはないのであるから、これまでのアからケの分類項目とは別に一項目を立ててまとめて考察することにした。また、「広く」という分類上のくくりから、必然的に論考の数も他のものを圧倒する結果となった。

では、そのような論考にはどのようなものがあるのか。ここに分類したものを、次に掲げていく。

編・号	発行年月	題 目	筆 者
1・2	大正八・四	中学校に於ける漢文科に就いて	斯文会研究部
3・2	大正十・四	師範学校国漢文科教員懇談会	師範学校・斯文会有志
5・4	大正十二・八	現代教育と漢文	塩谷 温
同	同	中等学校に於ける漢文教授に就いて	宇野 哲人
5・6	大正十二・十二	中学校課程改正案	故・岡田 秀夫
10・3	昭和三・三	中等教育改善に関する中学校長会の答申案を見て	林 古溪
10・7	昭和三・七	教育の効果と感	林 古溪
10・10	昭和三・十	中学校漢文教授革新私案	内藤 政太郎
10・11	昭和三・十一	中学教育改善案に於ける漢文科を論じて天下同憂の士に告ぐ	塩谷 温
10・12	昭和三・十二	漢文科を光輝あらしめよ	後藤 朝太郎
11・2	昭和四・二	漢文科に興味あらしめよ	後藤 朝太郎
11・3	昭和四・三	後藤石農学士に与えて中等漢文科を論ず	塩谷 温
11・5	昭和四・五	漢文の趣味と朗読朗吟	塩谷 温
11・6	昭和四・六	漢文教育雑感	竹林 貫一
11・9	昭和四・九	中等学校漢文科教授の革新	菅沼 貴一

20 ・ 4	20 ・ 3	20 ・ 2	19 ・ 10	19 ・ 9	19 ・ 2	同	19 ・ 1	18 ・ 10	18 ・ 4	18 ・ 3	18 ・ 2	17 ・ 10	同	同	17 ・ 9	16 ・ 12	15 ・ 12	15 ・ 9	14 ・ 8	12 ・ 7	12 ・ 2
昭和十三・四	昭和十三・三	昭和十三・二	昭和十二・十	昭和十二・九	昭和十二・二	同	昭和十二・一	昭和十一・十	昭和十一・四	昭和十一・三	昭和十一・二	昭和十・十	同	同	昭和十・九	昭和九・十二	昭和八・十二	昭和八・九	昭和七・八	昭和五・七	昭和五・二
同	同	第三回中等学校漢文科担任教員協議会	中等学校国語漢文科改正教授要目研究座談会	改正教授要目研究協議会と私の希望	同	第一回高等学校漢文科教員協議会	元田東野先生の遺文を読み現代漢学の使命に及ぶ	青年と精神生活	同	同	第二回全国中学校漢文科担任教員協議会	漢文の現代的価値	漢字は治世の要道	末を追ふ者	当面の漢文問題	徳川時代の漢字と現代の教育	古典の尊重	漢文古典教育振興策	学習の本質と教育精神	教育上より見たる国語改定案	国語漢文教育の根本義
				林 古 溪			高 森 良 人	山 口 察 常				松 井 武 男	澤 田 総 清	内 野 台 領	岡 井 慎 吾	小 柳 司 氣 太	阿 部 宗 孝	阿 部 宗 孝	松 浦 繁 太 郎	竹 林 貫 一	吉 田 辰 次

27 7 8 9	同	26 3	25 12	25 10	25 9	25 2	24 9	同	24 8	24 7	24 3	23 7	同	23 6	23 5	23 3	20 7	20 6	同
昭和二十・九	同	昭和十九・三	昭和十八・十二	昭和十八・十	昭和十八・九	昭和十八・二	昭和十七・九	同	昭和十七・八	昭和十七・七	昭和十七・三	昭和十六・七	同	昭和十六・六	昭和十六・五	昭和十六・三	昭和十三・七	昭和十三・六	同
<p>漢文普及講座授業視察及び同座談会記事 第三回中等学校漢文科担任教員協議会 講演「時局と漢文」 学制根本的改革の急務 学制の根本的改革の急務に関して 国民精神教養と儒教漢文 漢文教育を論じ儒教報国に及ぶ 漢文教育に就て 日本漢学の立場 大東亜戦と教育 漢文教育の新使命 ことばあらため 字音仮名遣の改定につきて 古典の読み方 日本の漢学に就いて 東洋古典の復権 日本学の建設と漢学 支那学の問題 支那学不振三論 日本の将来と斯文会の使命</p>																			
宇野哲人	田所義行	高田真治	飯島忠夫	高田真治	飯島正夫	野村岳陽	高田集蔵	林古溪	山本嘉太郎	小林躋造	大田兵三郎	飯島忠夫	和田正俊	林博太郎	最所顯文	世良亮一	塩谷温		

広く漢文教育の必要性を説いたものについてはさまざまな内容の論考があるが、漢文学習が教育的に大きい効果を及ぼす理由の第一として、多数の論者が挙げていることに、徳育を育む点がある。

第五編第四号（大正十二年八月）の鹽谷温「現代教育と漢文」では、まず「国民精神の不振」を言い、その解決の方策として「古典教育の精神陶冶に益ある事は、何人も異議なき所」として、「古典教育の必要」を強く主張し、「漢文は我が國の古典なり」としている。

また、同じ号には宇野哲人「中等學校に於ける漢文教授に就いて」が載せられている。ここで宇野は、「漢文は特に忠孝仁義の何物たるかを知しむるものとして、我國民道德の薰陶に必須缺くべからざるものであると信ずる」と明言している。大正期から昭和戦前期までの論考を概観していくと、儒教理念の振興を浸透させながら学校教育の振興を図っていくとする姿勢が感じられる。

昭和十年代に入ってくると『斯文』掲載の論考も、戦時色が次第に濃くなっていく。第二十編第七号（昭和十三年七月）の、鹽谷 温「時局と漢文」は、講演の題名からしていかにもという印象を受けるが、戦争に対しては、「東洋の安定を圖らなければならない」として戦争肯定をしてはいるものの、それだけでは不足であるということで、「武力と同時に文化政策に拠つて支那の誤れる所を指摘して、そして反省せしめなければならない」と、文化政策の充実を強調し、「支那の歴史、支那の地理位は頭の中に直ぐ浮ぶやうでなければ親しみが出ませぬ」という具合に、中国に就いての知識を持ち、理解を深めることを訴えながら、「其の思想は固より漢文に拠つて養ふ」と、漢文の役割を規定している。

第二十四編第七号（昭和十七年七月）の小林躋造「大東亜戦と教育」は、筆者が台湾総督経験の軍人ということもあって「古來からの武士道精神」が「未だ滅びず」という話を聞いて「日本の武士道といふものは、漢學の力に負ふことが多い」ことに考え至り、「漢學をもつともつと日本國民に教へたい」という思いを抱くという講演内容になっている。

第二十七編第七・八・九合併号〔昭和二十年九月〕は、紙の質が一段と低下してページ数もままならないという状況の中で、宇野哲人「日本の将来と斯文會の使命」という巻頭の論を載せている。「現下の急務は、國民生活の安定」だとして、日本の将来を「道義の刷新と文化の振興との二途」と言い、「文化の刷新」について「戦時中は専ら自然科学の奨励に終始」していたが、「人文科學も決して輕視するべからざること」を今後の課題としながら、斯文會の役割もそこにあることを訴えている。

「如是道義の刷新こそ、實に我が斯文會の奮闘すべき壇場である。國民は生活の不安定に脅かされ、禮教を思ふ暇無き今日、道義の退廢を匡救せんとするは極めて困難なれば、我が斯文會の任務の重且大なること勿論なり、努めざる可からざるなり。」

この号をもって『斯文』は一度その任を終える。組織改正された斯文會が新たに『斯文』を発刊しはじめるのは、昭和二十三年になつてからのことである。

五、おわりに

戦後、『斯文』は組織改正されて、昭和二十三年十二月一日付けの第一号をもって新たな出発をする。そこに掲載された漢字・漢文教育關係の論考は、全部で四十回のぼる。その内容別の内訳は、次のようになる。

- ・漢字、筆順に関するもの 五回
- ・訓読に関するもの 四回
- ・趣意書、意見書、陳情書類 五回

これらの論考については、漢文教育の論点から考えると、これまで見てきた創刊から昭和二十年の時期の論考の内容にほぼ重なるものが提出されていると考えられ、また、誌面の都合上もあり・本稿ではとくに言及しないことにしたい。ここでは、特に第五十六号〔昭和四十四年五月〕の大學漢文教育研究会訓點研究會の「漢文教科書の訓點の研究について」だけを取り上げる。

漢文教科書の訓點の不統一については、以前から論議の対象になっていたが、改めて検討を重ねた結果、明治四十五年三月二十九日の官報第八六三〇号に掲載された「漢文教授ニ關スル調査報告」に触れ、「不合理な點も發見されず、改めねばならない點もなかつた。これは、あの報告が實によく出來ているという證明にもなるのであるから、漢文教科書の編著者が、調査報告に準據して訓點をつけてくだされば、訓點の不統一は避けられるものと思う」として、現在の漢文訓読の拠り所を、もう一度確認している。

なお、論考の分類上、「今後の漢文教育に関するもの」の項目が二十六回と突出した数になっているが、戦前・戦中期同様に、多岐にわたる内容のものでも、広く漢文教育の今後の在り方についての論考であれば、ここにひとくくりにして数えた。

その内容について組織改正以前の戦前・戦中期のものとの違いは、戦前・戦中期の論考や提言が当時進行中の時局がらみのものが多いのに対して、組織改正後は専ら新制教育制度の中での漢文教育の位置づけという点に重点が置かれているというところにあると考えられる。

これまで見てきたように、『斯文』に載せられた漢文教育関係の論考にはさまざまな問題があり、『斯文』誌上で論議検討がなされてきた。ここで取り扱われてきた漢文教育問題は、現在も繰り返し取り上げられている。と言うよりも、現在論議されている漢文教育問題は、過去すでに『斯文』で論じられているものがほとんどである。ここで取り上げられていない漢字・漢文教育関係の問題といえば、コンピュータに関連した問題ぐらいではないだろうか。

最近では、高等学校での第二外国語として中国語が設置される場合が増えてきている。国際文化フォーラムの調査によれば、高等学校で中国語を開設している学校はすでに三〇〇校を超えるが、学校数から見れば、増加の頭打ち状況になっていると考えられ、⁽¹⁶⁾ 今後は質的な充実が求められる段階に入ることである。このように中国語教育が普及してきた環境ということとの関連性からも、漢文教育の在り方が考えられてもよいだろう。

小学校、中学校、高等学校といった学校現場での課題と取り組みについて触れてみたい。学校現場での漢字・漢文教育の課題といえば、大きくふたつが考えられる。ひとつは、指導時間数の著しい減少と、そういう状況下での現場における取り組み。もうひとつは、児童・生徒に対する漢字・漢文の興味付けに関する問題である。

まず、指導時間数の減少についてである。これまでに見てきたように、明治期以来、近代の学校制度の枠組みにおいて、漢字の削減と漢文の指導時間の減少というものが底流を流れていたことは否めない。それは今回の学習指導要領の改訂にあっても例外ではない。ある教科書会社の中学校国語教科書では、「中国の古典」の単元で従来まで扱われていた唐詩三首のうち一首が削られて、わずかに絶句と律詩を一首ずつしか学習しないで義務教育課程を修了するという内容になっている。

これほど少い時間数や教科書教材だけでは、あまりにも不十分である。そこで、漢字・漢文の指導を国語科の中だけに限定するのではなく、たとえば学級活動やホームルーム、道德の時間の活用といったふうに、より広い範囲で指導を行う

ことができないものか、それぞれ学校現場の実態に合わせながら検討していく必要がある。

たとえば、進路学習のひとコマ。中学三年生を受け持つのであれば、「十有五にして学に志す」「志学」という言葉を紹介しながら、将来の進路を考える年齢にきたことを生徒たちに話してみる。その際には、紙に書いた「志学」の文字を提示しながら話してみると効果的だし、あとでその紙を教室の壁に掲示しておいてもよいだろう。

漢字・漢文への興味付けについては、新出漢字の指導のときなどに、部首や旁が持つ意味について話していく機会を増やしていくことが必要ではないだろうか。これは、漢字の成り立ちについての紹介であってもいいだろう。とにかく、むやみに漢字の書き取りの練習だけを課するようなことを戒めながら、生徒たちへの興味付けを念頭に置いた指導をしていくことが大切ではないだろうか。毎日のこのような時間の積み重ねによって、児童・生徒たちにも漢字・漢文への興味が喚起されることだろう。こう考えると、学校という教育現場での地道な取り組みが、改めて重要視されてくる。

〔注〕

- (1) 『国語教育史資料』（増渕恒吉・東京法令出版）第五巻の概説に「政府は、同年八月二日学制の趣旨を宣言した太政官布告第二一四号とともに、『学制』を公布した。文部省は翌三日（太陽暦九月五日）『文部省布達第一三・一四号』を発し、太政官布告を添えて『学制』を全国に頒布した。右の太政官布告は、学制の前文に相当するものであり、『学制序文』と呼ばれ、また『御布告書』あるいは『勸学の御布告』『被仰出書』とも呼ばれた。」とある。

(2) 『法令全書』

(3) 『法令全書』

(4) 前掲『国語教育史資料』第五巻概説

(5) 麻生誠『近代化と教育』第一法規 第三章「近代化前期の教育体系と人間類型」

(6) 『明六雑誌』岩波文庫

- (7) 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫
- (8) 保科孝一『國語問題五十年』三養書房
- (9) イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店
- (10) 三浦 叶『明治の漢學』汲古書院
- (11) 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫
- (12) 田山花袋『田舎教師』岩波文庫
- (13) 長志珠絵「臨界点としての漢字・漢学」(『日本史研究』第四六二号)
- (14) 「昭和六年に満州事変が起こり、常用漢字制限の方法が崩れはじめた。というのは、日中戦争で名・人名の表外漢字を増加したこと、軍部が発表文その他でむやみに難しい漢字・漢語を使ったためである。」大野晋「国語改革の歴史(戦前)」(『日本語の世界16国語改革を批判する』中央公論社 昭和五十八年) この間の事情については、高田集藏自身も本文の中で、
「大正十二年から昭和六年を経て十七年に及ぶ時代の推移、わけでも非常時局の現在、曾てはさまで必要としなかった漢字が、
今日に於ては缺くべからざるものとなった爲め」と述べている。
- (15) 野地潤家『国語教育通史』共文社 昭和四十九年
- (16) 国際文化フォーラム『日本の高等学校における中国語教育の広がり』平成十二年

【参考文献】

◆国語教育関係

- 『国語教育史資料』増渕恒吉 東京法令出版 昭和五十六年
- 『國字國語改良年表』國語調査委員会 明治三十七年
- 『国語教育通史』野地潤家 共文社 昭和四十九年
- 『國語問題五十年』保科孝一 三養書房 昭和二十四年
- 『国語学史』上田万年 教育出版
- 『近代日本と国語ナショナリズム』長志珠絵 吉川弘文館 平成十年

『国語』という思想』イ・ヨンスク 岩波書店 平成十年

『近代国語教育史』西原慶一 穂波出版社 昭和四十年

『近代国語教育史』高崎正治 東京法令出版社 昭和五十四年

『国語学の五十年』国語学会 武蔵野書院 平成七年

『岩波講座日本語3・国語国字問題』岩波書店 昭和五十二年

『日本語の世界16・国語改革を批判する』中央公論社 昭和五十八年

『明六雜誌』(上) 岩波文庫 平成十一年

『教育学大全集3・近代化と教育』麻生 誠 第一法規 昭和五十七年

『アメリカ教育使節団報告書全訳解説』村井実 講談社学術文庫 昭和五十四年

『天皇と日本の近代』(上・下) 八木公生 講談社現代新書 平成十三年

『國語問題協議會十五年史』國語問題協議會 昭和五十年

『前島 密』山口 修 吉川弘文館 平成二年

『森 有礼』犬塚孝明 吉川弘文館 昭和六十一年

『臨界点としての漢字・漢学』長志珠絵 『日本史研究』四六二 平成十三年

◆漢文教育関係

『明治の漢学者たち』町田三郎 研文出版 平成十年

『明治の漢學』三浦 叶 汲古書院 平成十年

『明治漢文学史』三浦 叶 汲古書院 平成十年

『漢学者はいかに生きたか』村山吉廣 大修館書店 平成十一年

『長澤規矩也著作集第八卷 地誌研究・漢文教育』汲古書院 昭和五十九年

『斯文會八十年史』斯文會 平成十年

『日本漢学年表』斯文會編 大修館書店 昭和五十二年

◆原典資料

『官報』太政官文書局・内閣官報局・印刷局

『法令全書』内閣官報局 復刻原本 昭和四九年

『斯文』斯文會 大正八年

『日本近代思想体系・教育の思想』岩波書店 平成二年

『國語國字教育 史料總覽』国語教育研究會 昭和四十四年